



日本の国土は、亜寒帯から亜熱帯にまたがる大小の島々からなり、そこには屈曲に富んだ海岸線と起伏の多い山岳など変化に富んだ地形や各地の気候風土に育まれた多様な動植物相が見られます。

「モニタリングサイト 1000」では、このような日本列島の多様な生態系を、高山帯、森林・草原、里地、湖沼、湿原沿岸・浅海域、小島嶼に分け、あわせて 1000 か所程度のモニタリングサイトを設置しており、2003 年度より調査を実施しています。基礎的な環境情報の収集を長期にわたって継続することで、日本の自然環境の質的・量的な劣化を早期に把握し、得られた成果を保全施策や学術研究に活用することを目的としています。

森林・草原のモニタリングでは、樹木を長期的な環境変化の指標として、地表徘徊性昆虫を短期的な環境変化の指標として、鳥類を広域的な環境変化の指標として取り上げ、20 のコアサイト、28 の準コアサイト、約 420 の一般サイトで調査を行なっています。

- ・コアサイト： 毎年調査を行ない、毎木調査、落葉落枝・落下種子調査、地表徘徊性甲虫調査、鳥類調査を実施
- ・準コアサイト： 5 年に一度(一部は毎年)調査を行ない、毎木調査、鳥類調査を実施
- ・一般サイト： 5 年に一度調査を行ない、鳥類調査を実施

鳥類調査では、各サイトに 5 か所の定点を設置し、繁殖期と越冬期にそれぞれ 2 日間かけて 4 回(1 地点 1 回あたり 10 分間)、周囲に生息している鳥類の個体数調査を実施しています。

「陸生鳥類調査情報」は、結果の速報や関連情報をお知らせするために、2009 年より毎年 2 回発行しています。バックナンバーは以下よりご覧いただくことが出来ます。

<http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/index.html>

モニタリングサイト1000

陸生鳥類調査 情報

2017年 9月号 Vol.9 No.1



Emberiza schoeniclus
Photo by Kaoru Fujii

結果速報

モニタリングサイト1000 2016年度越冬期 一般サイト結果速報 森本 元（日本野鳥の会）

全国約1,000ヶ所のモニタリングサイトのうち、森林・草原の一般サイトは約420ヶ所を占める重要な分野です。調査には、多くの市民調査員のみなさまにご協力いただいております。森林・草原の一般サイトでは、概ね5年に1度、鳥類と植生概況について調査しています。2016年度の越冬期は、79サイト(森林62サイト・草原17サイト)に調査を依頼していますが、現時点でデータが集まり集計が完了している森林49サイト、草原14サイトの計63サイトのデータを用いて、中間報告いたします。

記録された鳥類

合計126種(森林99種・草原93種)の鳥類が確認されました。これは昨年とほぼ同じ値でした(昨年の森林・草原の合計種数は、森林48サイト・草原12サイトの計60サイトで123種)。草原サイトは年変動が大きいので、森林サイトのみを比較すると、昨年の森林サイトは94種でした。つまり、昨年と今年を対比すると、調査地点数がほぼ同数で、確認種数もほぼ同等でした。

モニタリングサイト1000調査では、毎年調査地点を変えながら、5年に1度調査が行なわれています。このような背景のもとで、モニタリングサイト1000の結果がどうであったかを振り返ると、確認される種数は、毎年ほぼ同じなので、複数年にわたり長く安定した傾向にあると判断されます。つまり、今年の結果は(も)平年並であったといえるでしょう。なお、確認種数は調査サイト数によっても増減しますが、両者の関係について御興味のある方は、このニュースレター過去号にて詳しく触れていますので、御参照下さい。

自然環境は少しずつ変化し、そこに生息する鳥類も変化していきます。しかし、個々の場所で変化していても、広い地域で眺めてみると、全体としては意外と変わらずに安定している、ということがあります。自分のフィールドだけを見ていると、増えた種がいたり減った種がいたりしても、他所に行くと違っていたりするものです。このように、広く全国の多地点を同時に把握し、平年の状態を確認できることが、モニタリングサイト1000事業の特徴といえましょう。そして、大きな変化が起きた際には、それを確認する為の基盤となります。普段の平常の状態が分からなければ、異常な状態

を検出できません。それゆえ、皆さんの力を合わせた、日頃の地道なモニタリングが重要なのです。

出現率と優占度

次に、森林における出現率、優占度の上位種を表1・2に示しました(出現率:ある種の出現サイト数÷調査サイト数、優占度:サイトでのある種の個体数÷総個体数を平均したもの)。出現率を見てみると、第2期(2008～2012年度)の上位10種は上位からヒヨドリ、ハシブトガラス、コゲラ、シジュウカラ、ヤマガラ、エナガ、メジロ、ウグイス、カケス、シロハラで、今年もそれとほぼ一致していました。

この傾向は今年だけの傾向ではありません。年により順位に多少の変動はありますが、上位の種構成は毎年ほぼ同じ種達で推移しているのです(図1)。越冬期の1位は長年にわたってヒヨドリかハシブトガラスでしたが、昨年はコゲラが1位になるという大きな変化が起きました。これらに加えて、シジュウカラもトップ集団の常連です。また、メジロ、

表 1. 2016年度越冬期の出現率の上位10種

a) 森林 (n = 49)			b) 草原 (n = 14)		
順位	種名	出現率	順位	種名	出現率
1	ヒヨドリ	98.0	1	ハシブトガラス	100.0
2	ハシブトガラス	93.9	2	ツグミ	92.9
3	シジュウカラ	87.8	2	ホオジロ	92.9
4	コゲラ	81.6	4	カワラヒワ	85.8
5	ヤマガラ	75.5	4	ハシボソガラス	85.8
6	エナガ	69.4	6	ウグイス	71.4
6	メジロ	69.4	6	キジバト	71.4
8	ウグイス	55.1	6	ジョウビタキ	71.4
8	シロハラ	55.1	6	トビ	71.4
10	キジバト	53.1	6	ヒヨドリ	71.4
			6	モズ	71.4

表 2. 2016年度越冬期の優占度の上位10種

a) 森林 (n = 49)			b) 草原 (n = 14)		
順位	種名	優占度	順位	種名	優占度
1	ヒヨドリ	14.7	1	ホオジロ	9.7
2	ハシブトガラス	7.2	2	オオジュリン	9.0
3	エナガ	6.6	3	スズメ	8.2
4	メジロ	6.1	4	ヒヨドリ	6.4
5	ヤマガラ	5.7	5	ツグミ	4.9
6	シジュウカラ	5.7	6	ハシブトガラス	4.1
7	マヒワ	4.5	7	カワラヒワ	3.5
8	コゲラ	3.6	8	ムクドリ	3.3
9	アトリ	3.2	9	タヒバリ	3.1
10	シロハラ	3.1	10	ウグイス	3.0

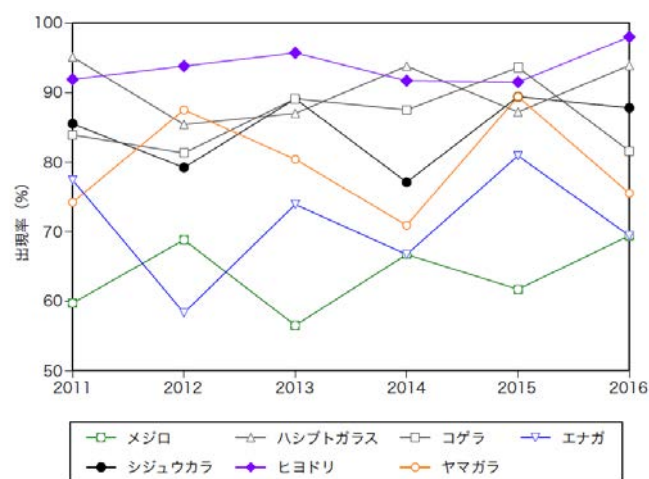


図 1. 越冬期の出現率上位種の年変動と、繁殖期の出現状況

エナガ、ヤマガラなども、安定して毎年のトップ10に入っており、その順位はほぼ同じような位置で上下しています。さらに、種の順位が高いほどより安定的で、順位の低い種では年変動が大きい傾向にあることも見て取れます。ともあれ、いずれの種もある程度の年変化はあっても横ばいといえそうです。特に、最上位種のヒヨドリ、ハシブトガラス、シジュウカラの出現率は、とても高い位置をキープしており（約80%以上）、増減があるようには見えません。

コゲラの動向は

コゲラは、近年、各地で増えている言われています。しかし出現率でみると、80%台から90%前半の範囲、つまり、その変動の幅が10%程度の狭い中で変化しており、増えているようには見えません。ただ、順位については、万年2位～4位の間でしたが、昨年ついに1位になり、コゲラが実は増加しているのか、この出現率が維持されるのかに注目していました。しかし、今年の結果はというと、また4位まで落ちてしまいました。ただし、4位といっても、過去と同じく80%台はキープしており、過去の変動の範囲で極端に減ったわけではありません。

順位が下がってしまった理由として、今年の調査地の組み合わせがたまたま、コゲラが多くないサイトであった可能性があります。モニタリングサイト1000の調査サイトは毎年変わります。地域、環境（広葉樹林や針葉樹林等）の割合が毎年ほぼ同じになるように調査設計はされていますが、それでも多少はその影響が出てしまう可能性があるのです。もしそうだとすると、今年順位は落ちましたが、同じ調査地で比べると、「コゲラは増えていた」となる可能性もあります。そこで、今回とほぼ同じ地点が調査されている5年前



コゲラ(藤井 薫)

の結果と比べてみました。すると5年前の83.9%に対して、今年は81.6%と逆にわずかですが減少していました。したがって、出現率からみると、コゲラが増えているとは言えず、ほぼ安定しているようです。

コゲラが、近年、増加してきたのは、都市公園などで樹齢が上がり、枯れかけの樹木を好むコゲラ向きの環境が増えてきたためではないかと考えられています。他方、モニタリングサイト1000の調査地には、都市公園などは含まれず、自然の森林が対象です。そのため、都市部とは少し事情が違うのかもしれませんが。たとえば仮に天然の森林でコゲラが増えていたとしても、それは出現率80～90%台の範囲でのわずかな変動であり、その変化はかなり小さいことになります。これは、コゲラがそれまで生息していなかった都市公園や住宅地でよくみるようになるという大きな変化とは背景が違うと考えられます。よって、ひいき目に見てコゲラが増えていると仮定しても、第2期の出現率4位だったのが、第3期には3位になる程度でしょう。

増えていると言われているコゲラについて、この結果を意外だと感じる方もいらっしゃるかもしれませんが、そうでないという方もいらっしゃると思います。自分のフィールドといった身近な経験だけでなく、日本全国の広域でどうであるかを知ることが出来る点も、モニタリングサイト1000の利点といえましょう。

調査へのご協力ありがとうございました

今回の結果からも、モニタリングサイト1000が推進する長期調査を継続することの有用性の一端を感じていただけたものと思います。毎年の調査結果の積み重ねが、各種が増加しているのか減少しているのか、通常の変動の範囲だったのかの判断を可能にします。その判断の為には、各地のデータの集積が必要です。そして、こうした全国規模の調査を継続できるのは、多くの方々のお力添えの結果です。日本の自然環境のモニタリングの実施には、大勢の人々のご協力による調査継続が欠かせません。引き続き、皆様の御協力をよろしくお願いいたします。

2016年度越冬期の一般サイト調査には、94名の皆様のご協力をいただきました。最後にお名前を記し、お礼に代えさせていただきます（敬称略、順不同）。

星英男、村山良子、寺田紋子、金谷道行、田中義和、中崎悦子、久高将和、佐野清貴、木原直人、吉田和人、岩崎健二、関高史、田中利彦、竹田憲正、古田和生、太田達夫、田中忠、中尾禎志、小林繁樹、葉山政治、揉井千代子、平井正志、西村四郎、頼ウメ子、石井隆、三浦隆、工藤芳郎、前田洋一、松田久司、児山章二、小荷田行男、長谷部謙二、井上幹男、中山和也、磯部浩、住岡昭彦、谷畑藤男、宝田延彦、酒井泰和、工藤和彦、柳町邦光、森山春樹、廣田博厚、関川實、曾我茂樹、近藤健一郎、野中純、川田裕美、平野敏明、佐藤里恵、一戸静夫、後藤慎一、飛鳥和弘、今里順一郎、山口雅生、斉藤信、高畑晃、野村亮、川内博、吉邨隆資、豊田陽一、田村耕作、今井健二、江島浩紀、長谷部真、田中英昭、田丸八郎、奥野俊博、黒木直子、下土居知子、田中陽子、長江卓哉、松原真知子、千葉博光、土居義道、阪口昌通、奥津百合子、前田治子、清水敏明、山口義盛、小野沢満、濱崎登、田代省二、上岡隆司、依田昌晃、川内桂子、沢田宏一、堀尾岳行、島崎舜次、吉原規明、新山英憲、中本聰一、後藤雅子、宮森和浩

結果速報

2016年度 コア・準コアサイト鳥類調査
越冬期結果報告

植田陸之(バードリサーチ)

鳥の少なかった今年のコアサイト

2016年度の越冬期は、21サイトで調査を行ない、61種の鳥が記録されました。例年越冬期には70種前後の鳥が記録されています。記録種数は、年により調査地の変わる準コアサイトの場所や調査地点数の影響を受けますが、今年の調査地点は例年より多く、また小笠原のような特殊な場所や粕谷のような、比較的種数が多く記録される南の調査地も含まれており、準コアサイトが原因で種数が少なくなったわけではなさそうです。したがって、この冬は例年より山の鳥が少な目だったと考えられます。

さらに、バイオマスについて見てみました(表1)。南の調査地は平年並みですが、北の調査地では、例年よりかなり

表 1. 2009～2016年越冬期コア/準コアサイトの確認種数

サイト名	越冬期バイオマス(kg/10ha)							
	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016
雨龍	2.83	6.66	0.63	1.02	5.42	2.38	0.27	1.17
野幌		21.44				29.51	24.32	15.98
苦小牧	5.98	25.83	22.38	22.97	22.98	27.66	17.42	15.52
青葉山		79.10				35.52	29.17	19.22
小佐渡	11.97	14.09	18.88	10.47	38.07	8.88	23.20	10.93
那須高原	5.14	2.31	12.70	3.58	4.78	2.65	7.02	3.84
小川	10.57	22.68	10.84	7.41	24.16	12.46	23.71	16.92
高原山	5.01				4.12			
筑波山	11.12				28.19			
大山沢	3.78	2.37	4.36	3.24	1.23	2.27	1.98	2.07
秩父	3.55	3.26	10.39	5.84	8.16	18.25	9.18	4.53
西丹沢	6.43				4.68			
富士			15.88					
函南		8.35					13.56	
愛知赤津	9.02	10.85	12.53	7.24	8.24	9.06	10.43	3.87
上賀茂	23.79	15.61	33.13	23.41	24.68	30.16	22.83	21.06
春日山			32.26					19.86
和歌山	7.52	1.05	6.05	1.84	8.63	3.04	5.27	84.46
半田山			1.74					
宮島	115.42					39.52		
市ノ又	3.16	5.42	4.64		2.73	8.92	6.26	11.01
佐田山				13.41				
対馬龍良山				6.31				
粕屋			15.43					6.21
椎葉	7.46					12.43		
綾		4.99	3.92	4.32	6.99	6.22	7.33	6.38
田野	12.63	13.55	5.61	9.71	8.37	15.83	8.05	9.36
屋久島照葉樹林		22.51						20.26
屋久島スギ林				2.73				
奄美	30.62	35.48	10.21	14.27	14.31	23.35	23.80	21.43
与那	38.98	30.44	23.33	20.04	21.93	22.49	29.25	22.64
西表	18.13						21.84	
小笠原石門			3.35					6.53



和歌山サイトで多くの個体が記録されたアトリ(三木敏史)

バイオマスが少ないことがわかります。この冬は、種数だけでなく、個体数で見ても山では鳥が少なかったと言えます。一般サイトでは例年並みという結果でしたが、コアサイトはより奥山にサイトが分布しているため、こうした違いが生じたのかもしれませんが、なお、和歌山サイトでは、例年と比べて突出してバイオマスが高かったのですが、これはアトリの大きな群れが観察されたためです。

ウグイスの越冬数の動向は？

繁殖期の調査では、ウグイス、コルリ、コマドリなどの藪を生息地とする鳥が減少傾向にあることがわかっています。シカがササなどの藪になる植物を食べ、生息環境が減ったために、これらの鳥が減少したと考えられていますが、これらの種の越冬個体数も減っているのでしょうか？ コルリとコマドリは夏鳥で、ソウシチョウは越冬期に記録されているサイトが少ないので、ウグイスについて見てみました。

ヨーロッパの鳥類モニタリングで個体数変動を解析するのに使われているTRIMというソフトウェアを使って、これまでに4回以上の越冬期調査が行なわれているサイトのデータを使って、2009年からのウグイスの個体数変動をみてみると、2012年以降は徐々に減少していますが、期間全体では明確な増減は認められませんでした。

ウグイスはササ藪などに巣をつくるため、繁殖期は藪への依存度が高い鳥です。しかし冬は庭や公園などやや開けたところでも普通に越冬しています。また、冬には標高の低い場所に移るなど、季節的な移動も行ないます。このような季節による生息環境の微妙な違いや季節移動により、越冬期には繁殖期のように明確にはウグイスの減少が検出できなかったのかもしれませんが、しかし、2012年以降は減少しているようにみえるように、越冬期にも徐々にシカの影響がでてきているのかもしれませんが、今後とも注意してモニタリングを続けていきたいと考えています。

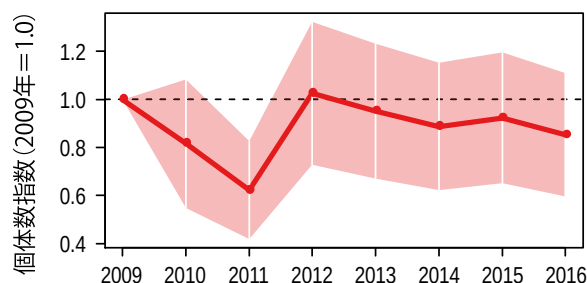


図 1. ウグイスの越冬数の変遷。TRIMという個体数変動解析ソフトウェアをもちいて2009年の個体数を1とした指数で示した

調査へのご協力ありがとうございました

2016年の現地調査にあたっては、岩本富雄、植田陸之、上野あや、勝野史雄、川崎慎二、金城孝則、柴田憲一、外間 聡、高美喜男、高橋啓介、瀧本宏昭、千葉 舞、知花重治、中村 聡、中村 豊、沼野正博、濱田哲暁、葉山雅広、平野敏明、柳田和美、梁瀬桐子、(敬称略)ほか多くの方々のご協力をいただきました。皆様に感謝いたします。

事務局からのお知らせ

モニ1000・繁殖分布調査の違いにご注意ください

野口真磨子（日本野鳥の会）

2003年にスタートした重要生態系監視地域モニタリング推進事業（通称：モニタリングサイト1000）のうち、森林・草原の陸生鳥類調査（以下、陸生鳥類調査）も早いもので、第3期最後の年となりました。今後、これまでに得られた調査結果を基に取りまとめを進めていく予定です。

この陸生鳥類調査とは別に、2016年から始まっている調査が、「全国鳥類繁殖分布調査」（以下、繁殖分布調査）です。この調査は1970年代と1990年代に日本全国の鳥の分布を明らかにするために全国約2000人のバードウォッチャーの協力を得て実施されました。陸生鳥類調査にご協力頂いている調査員の皆様の多くは、この繁殖分布調査にもご協力いただいていることと思います。この2つの調査は、目的と方法が異なります。そこで、今回はこの2つの調査の違いについてまとめたいと思います。

2つの調査の違い

○陸生鳥類調査

・調査の目的

モニタリングサイト1000は、日本の生態系を8つに分け、それぞれの分野ごとに継続した調査を行なっています。陸生鳥類調査は【森林・草原分野】の調査の1つで、鳥の生息数等を調べ、樹木や昆虫等の結果とあわせ森林・草原の生態系の変化をモニタリングしています。調査サイクルは5年を1期とし、全国約420か所にある調査サイトを5年間で全て調査します。そのため、一度行なった調査サイトを次に調査するのはおよそ5年後ということになります。

・調査方法

調査は繁殖期に2回（約1km程の距離を一往復）、越冬期に2回（繁殖期同様）の合計4回実施し、各々の調査地点内に設けられた5つの定点でそれぞれ10分間の定点観察を行ないます。記録は半径50mとそれ以遠に分けます。記録内容としては、①種名②個体数（成、幼べつ）③さえずり、です。繁殖期の調査では、鳥類調査に加え、植生についても調査します。

○繁殖分布調査

・調査の目的

繁殖分布調査は、自然環境保全基礎調査の中に位置づけられた調査です。自然環境保全基礎調査は「緑の国勢調査」とよばれる日本国土全体の状況を把握するための調査で、鳥類では、他の分類群と比べて「繁殖」という重要なステージの情報が把握できるため、特に繁殖分布調査として行なわれてきました。繁殖分布調査の調査コースは全国に約2,300が所あり、これまでに1970年代と1990年代に調査されてきました。そして、3回目の調査として2020年の完成を目指して調査が行なわれています。

・調査方法

調査は現地調査とアンケート調査の2つです。現地調査のコースの距離は約3kmです。実施時期は繁殖期に1回で、コース上の2地点で定点観測調査を30分、コースを歩いている間はルートセンサスを行なって頂きます。記録はコースの両脇50mの範囲とそれ以遠にわけて確認されたものを記録します。記録内容としては、①種名②個体数（成、幼べつ）③さえずり④その他繁殖の可能性に関する行動、です。現地で記録した内容を基に、繁殖状況票へランクを記録します。アンケート調査では、現地調査へ向かう道中に確認されたものや、普段のバードウォッチングの記録、文献情報等を記入していただきます。

2つの調査の調査地が同じことも・・

今回は調査の目的と調査方法の違いについて、簡単にまとめました。細かい違いについては、調査される前にマニュアルをご覧ください。

質の違う相互の調査結果をお互いに利用できるように、陸生鳥類調査と全国繁殖分布調査の調査コースの多くは重なっています。そのため、陸生鳥類調査を実施したかと思えば、その次の年には繁殖分布調査を行なっていたかといったケースも今後増えてくるかもしれません。繁殖分布調査の調査用紙は、基本的に希望者以外はインターネットからダウンロードしていただくのに対し、陸生鳥類調査の場合は、調査実施が確定しますと事務局から調査用紙をお届けしております。調査用紙なども見ながら実施予定の調査がどちらなのか、確認していただければと思います。

表1. モニタリングサイト1000（陸生鳥類調査／一般サイト）と全国鳥類繁殖分布調査の違い

	モニタリングサイト1000（陸生鳥類調査・一般サイト）	全国鳥類繁殖分布調査
調査間隔	5年に1度	20年に1度
調査地点	約420地点	約2,300地点
目的	重要な生息地で鳥の 個体数 変化をモニタリングする	全国の鳥の 分布 の状況と変化を明らかにする
調査時期	繁殖期と越冬期にそれぞれ2日間	繁殖期に1日
調査方法	5定点での スポットセンサス 、植生概況調査	ルートセンサス （約3km）と 2定点 での調査
ホームページ	https://www.wbsj.org/activity/conservation/research-study/monitoring1000/	http://www.bird-atlas.jp/
事務局	日本野鳥の会	バードリサーチ

事務局からのお知らせ

モニ1000サイトとは異なりウグイス増加？ ～全国・東京都鳥類繁殖分布調査から～

植田陸之・佐藤 望(バードリサーチ)
葉山政治(日本野鳥の会)

全国鳥類繁殖分布調査は1970年代と1990年代に環境省により行なわれ、昨年からバードリサーチ、日本野鳥の会などの5団体のNGOや大学等研究機関、環境省などの官民学の合同調査として、全国のたくさんの方々の参加のもと、2020年までに全国の鳥の今を明らかにしようとしている調査です。調査に参加いただいている皆さまありがとうございます。調査は2年目に入り順調に進んでいます。今年はそれに加え、より詳細なメッシュで繁殖分布を調べる調査が東京で始まっています。

小型魚食性の鳥の分布が縮小

昨年は約500コースで現地調査が行なわれ、今年は7月20日時点で430コースのデータが戻ってきています。これを過去の調査結果と比べると、外来鳥と大型の魚食性の鳥の分布が広がっており、反対にカイツブリのような小型の魚食性の鳥の分布が縮小している可能性が見えてきます。また、夏鳥に復活の兆しがあることも見えてきます。徐々にデータが増えてきていますので、こうした傾向が全国一律の傾向なのか、それとも地域によって異なっているのかなど明らかにしていきたいと思えます。



図1 分布が縮小しているカイツブリ(増田 裕)

低地で分布を拡げているウグイス

東京都では、より詳細な1kmメッシュでの分布調査を2017年度より始めました。この調査も東京都により1970年代と1990年代に実施されています。今年調査を行なった63メッシュについて、その時の調査結果と比較してみると、モニ1000調査では減少が指摘されているウグイスが、東京都では逆に分布を拡大させていることがわかりました。

調査地の中でも分布の拡大している地域としていない地域があるので、それを地図化してみると(図2)、樹林のひろがる山地では分布が変化していないのに対して、住宅地や農耕地がひろがる低地で分布が拡大しているのがわかります。つまり、モニ1000調査で対象となっている森ではな

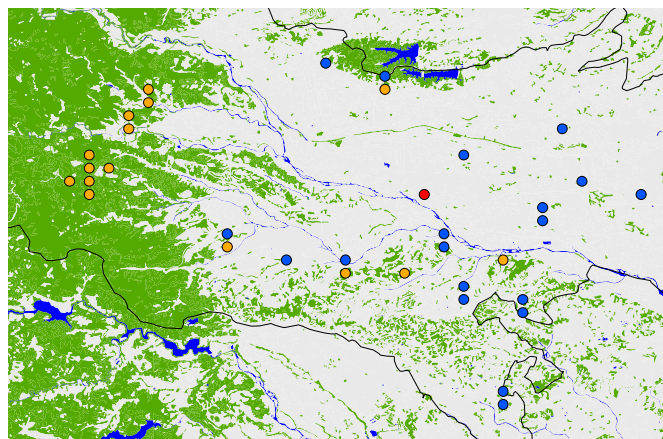


図2 ウグイスの分布の変化。●今回新たに確認されたメッシュ、●前回今回両方とも記録されたメッシュ、●前回記録され、今回は記録されなかったメッシュ。背景図は、緑が樹林、青が河川。

く、市街地でウグイスの分布が拡大しているのです。東京ではウグイスだけでなく、キビタキ、エナガ、メジロといった樹林に生息している鳥たちの分布も低地へと拡大しています。低地では街路樹が大きくなり、また公園や河川敷、雑木林の木も大きくなっています。おそらくそのためこうした鳥たちの分布が広がっているのだと思われます。

調査にご協力ください

全国鳥類繁殖分布調査は、これまでに半分近くの調査地を調査することができました。しかし、香川県のようにすでに全コースで調査が行なわれた県もありますが、実施率、責任者決定率ともに低い県もまだあります。登録率と調査実施率の低い都道府県10県を表1に示しました。これらの県では、この繁殖分布調査が行なわれていることもあまり伝わっていない可能性があります。お知り合いの方などに、こんな調査が動いていること、広報いただけたら助かります。よろしくお願いいたします。調査に協力いただける方の、調査の参加登録はこちらから。

<https://db3.bird-research.jp/~birdatlas/volunteer.html>

表1 調査地の登録率、実施率の低い都道府県

都道府県	登録率	都道府県	調査実施率
佐賀県	13.3	佐賀県	6.7
高知県	30.4	沖縄県	7.8
岩手県	36.9	鹿児島県	9.2
鹿児島県	43.4	群馬県	17.5
沖縄県	47.1	岩手県	19.0
福島県	49.3	宮崎県	20.9
群馬県	52.5	島根県	21.1
島根県	52.6	高知県	21.7
福岡県	59.0	北海道	28.5
北海道	59.8	京都市	28.6

全国鳥類繁殖分布調査

主催団体: バードリサーチ, 日本野鳥の会, 日本自然保護協会, 日本鳥類標識協会, 山階鳥類研究所, 環境省 生物多様性センター

事務局からのお知らせ

モニタリングサイト1000 研修・交流会のご案内

野口真磨子(日本野鳥の会)・植田睦之(バードリサーチ)

モニタリングサイト1000事業は第3期調査の5年目、最終年を迎えました。このような、市民による大規模かつ長期的な調査には、調査員の皆様の継続的なご協力が欠かせません。また、次世代の調査員の確保も必要です。

陸生鳥類調査では、昨年度に引き続き、各地域でさまざまな調査活動をされている方の成果発表や情報交換を通して、参加者同士の交流を深めることを目的とした研修会を実施します。また、昨年から調査が行なわれている「全国鳥類繁殖分布調査」についてもご紹介いたします。ベテランの方はもちろん、バードウォッチング初心者の方や、野鳥の調査研究に興味のある学生さんの受講も歓迎いたします。この研修会を機会に、あなたも鳥類調査員としてデビューしませんか？

今年は全国3か所で開催します。日程や会場の詳細は、ホームページやメールでご案内いたします。



参加申し込み先



専用サイト「日本野鳥の会 モニタリングサイト1000」で検索もしくはQRコードから

Fax: 03-5436-2635

(日本野鳥の会モニタリング係)

件名は「研修会申込み」とし、お名前、電話番号、メールアドレス(あるいはFAX番号か住所)、参加会場、参加日程、事例発表の有無(タイトル)、懇親会参加の有無をお知らせください。

モニタリングサイト1000 調査研修会

【主催】 日本野鳥の会・バードリサーチ

【開催場所】

<長野県> 日程未確定
長野県内にて開催予定、詳細は未定

<佐賀県> 2017年11月18日(土)～19日(日)
佐賀県内にて開催予定、詳細は未定

<東京都> 2017年12月2日(土)～3日(日)
日本野鳥の会事務所&国立科博附属自然教育園

※ 開催日時や場所等の詳細については、専用サイトにて情報配信いたします。以下のページをご覧ください。

<http://www.wbsj.org/mng/?p=987>

【内容】

初日 午後から

モニタリングサイト1000の事業概要とこれまでの成果
参加者による事例発表*と情報交換

※団体・個人の活動に関わらず、話題を提供いただける方を募集します。

講義終了後:懇親会

2日目 午前中のみ

野外実習:鳥類のスポットセンサス法と簡易植生調査

【参加対象】

調査に興味のある方(経験不問)

(会場の都合で30～40人程度まで。定員を超えた場合は参加できないことがあります)

【参加費】

無料(ただし入園料や懇親会は実費を徴収)。

お問い合わせ先

日本野鳥の会 モニタリングサイト1000担当

〒141-0031 品川区西五反田3-9-23丸和ビル

Tel: 03-5436-2633 Fax: 03-5436-2635

Mail: moni@wbsj.org